

藤田湘子の百句 野本京 選

令和五年一月一日 (2023.01.01)

雁ゆきてまた夕空をしたたらす  
『途上』

夜のわがこころの行方いなびかり

羽蟻の夜かなしき家を出て歩く

愛されずして沖遠く泳ぐなり

逢ひにゆく八十八夜の雨の坂

白地着て行きどころなしある如し

團栗にうたれし孤獨地獄かな

音楽を降らしめよ夥しき蝶に

山茶花やいまの日暮の旅に似て

落葉松の雨落葉松を寒くせり

柿若葉多忙を口實となすな

胸の底わくら葉たまるためておく

心づけばいつもひとりやはこべ萌ゆ

直視あるのみ夏は真赤な花愛し

枯山に鳥突きあたる夢の後  
『狩人』

掌中に乳房あるごと春雷す

謎もなし穴掘れば穴に雪降り

孔雀まで吹かれて來り春の暮

冬蝶のむくろを掃いてあそびけり

春の雪研師は海を想ひけり

孔雀よりはじまる春の愁かな

まんじゆさげうすきねむりをもてあそぶ  
『春祭』

日傘して汽笛の音の次を待つ  
うすらひは深山へかへる花の如  
百本の桔梗束ねしゆめうつゝ  
火事跡に海見えたるあはれかな  
大風のたましひぬけの椿百  
鯉老いて真中を行く秋の暮  
大寒やわが慾をわがさみしめり  
しだれつゝこの世の花と咲きにけり  
夕ぐれのづかづかと來し春の家  
人戀うてをれば世に古る櫻かな  
はくれんの散るやをみなを知りしごと  
月初はなのけふは遊ぶ日藤若葉  
蠅叩此處になければ何處にもなし  
死ぬほどの位もなくて早かな  
物音は一個にひとつ秋はじめ  
芋の秋湧いて泪のふたみつぶ  
鳴るたびに秋の風鈴とぞ思ふ  
柊の花最小をこゝろざす  
寒ければ君來るわれの想ひ函  
ふるさとの海は鳴る海蓬餅  
水仙やたそがれは海おもふ性さが  
わが捨てし望みの數や西行忌  
これよりは花の十日ぞ心せよ  
藤の虻ときどき空くうを流れけり  
子規ほどの根氣はあらず白團扇  
秋晴やいのちをかろく家の中  
來る人の來る時過ぎぬ枇杷の花

『一個』

『去來の花』

いぼむしり夜風に乗つて来てくれし

『黒』

母見舞ふ心となりぬ蓼の花

秋の風病母の見たる虚空かな

元日や風とほりゆく草の形なり

をりをりの初心に秋はねこじやらし

『前夜』

佛壇の大きな家の春の暮

月明の一痕としてわが歩む

年暮れぬわが墓欲しき早雲寺

家を出て家に歸りぬ春の暮

日のみちを月またあゆむ朴の花

原つばは原つば色に春みぞれ

山川の凡景にして百合ひらく

湯豆腐や死後に褒められようと思ふ

水母にもなりたく人も捨てがたく

秋風のうしろへまはれしじみ蝶

ゆくゆくはわが名も消えて春の暮

蝸や死までの扉いくつある

生しゃうたぬし春の畑のつむじ風

ひぐらしの方かたへ行かうといつも思ふ

葛飾や一弟子われに雁わたる

風鈴のひつきりなしも困るなり

瑠璃蜥蜴さみしからずや息合はそ

闊歩して詩人にならうねこじやらし

梟が啼けば荒野へ還るわれ

冬の蜂死んで見せうと死ににけり

死蟬をときをり落し蟬しぐれ

団栗を拾ひ山へは褒言葉

『神楽』

何欲といふのか木菟になりたしよ  
春の鹿幻を見て立ちにけり  
春の草孤独がわれを鍛へしよ  
さみしいか淋しくはなし地虫出づ  
こめかみに風ひびかふを秋思とも  
うしろからうむを言はせず秋の暮  
雪の夜のしづかな檻の中にをり  
時間からこぼれて冬のしじみ蝶  
死蟬のほつたらかしが消えにけり  
死者とまだ訣れてをらず白木槿  
厄介と言へば死ぬこと葦の花  
一塊のででむし動くあさうか  
今を在る者が愛弟子冬木の芽  
ぺしやんこの紙風船の時間かな  
考への行止りより黒揚羽  
蓑虫の感情の糸けふ長し  
何か言ふまへの唇鳥渡る  
虎落笛わがのどぶえを誘ふなり  
月光のまさぐりし竹皮を脱ぐ  
ひとすぢの風が月から夕黄菅  
ちゆと吸へば土用蛭もちゆと応ふ  
文藝に修羅無くなりぬみやこ鳥  
虻数分にこにことわが傍にゐし  
木蓮の声なら判る気もすなり

『てんてん』